

## ゴールドンルール／黄金律

孔子は弟子の仲弓から「処世訓の基本を一語で述べたものがあるでしょうか」と尋ねられとき、「仁という言葉があるではないか。自分にして欲しくないことを、人にもしてはならない」と答えたという。また、ユダヤの有名な学者ヒルレルは、「わたしが片足で立っている間に律法のすべてを教えてくださいなれば、わたしはユダヤ教に改宗したい」という異邦人に、「あなた自身の憎むことをあなたの隣人にしてはならない。これが律法のすべてであって、他のものはすべてその注釈である」と答えたという。

これらの先人たちの言葉は、主イエスの教えと極めて似ている。主イエスはご自分の弟子たちに対して、こう言われた、「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい。これこそ律法と預言者である」（マタイ7:12）。この主イエスの言葉は、一般に『黄金律』（ゴールドンルール）と呼ばれ、主イエスの教えの中でもっとも有名なことばのひとつである。パークレーはこれをキリスト教倫理の最高峰であると言っている。

この主イエスの言葉を、先の孔子およびヒルレルのことばと比較してみると、表面的な類似性に関わらず、その内容において極めて相違していることが分かる。「自分にして欲しくないことは、人にもしてはならない」とか、「自分の憎むことを隣人にもしてはならない」という教えが消極的な性格を持つものであるのに対して、主イエスの教えはきわめて積極的な内容をもっている。

ただ「～してはならない」というのではなく「～しなさい」という積極性である。自分が愛されたいと願うように他人を愛し、自分が許されたいと願うように他人を許し、自分が助けをもらいたいと願うように他人を助け、自分が理解されたいと願うように他人を理解していく、隣人に対するそのような積極的な愛の心である。

そのような愛は生まれつきのままの人間性からは出てこないことを私たちは知っている。この言葉の位置する文脈が教えるように、それは、神を「天の父」として知った者、すなわち、神がわたしのよう「悪しき者」をもみ心にとめ、受け入れてくださり、また「わたしの父」として限りない愛をもってわたしを取り扱ってくださる、ということを知ったときにはじめて持つことが出来る愛の心である（7:9～11）。

この主イエスの言葉の直前について「だから」という接続詞がそのことを教える。肉の父親がその子らに対する以上に「天の父」は私たちに対するその深い愛と関心をもって、常に最善となるように、私たちを取り扱ってくださるお方であるから、「だから（と主は言われる）そのように、何事でも人々からして欲しいと望むことは、あなたがたもまた、人々にそのとおりにしなさい」という。

この言葉は単なる道徳訓ではない。主イエス・キリストにあって私たちに注がれた父なる神の愛、すなわち十字架の愛へと私たちの目を向けさせる。罪からの救いという私たちの最大の課題を一身にお引き受けになられて十字架の道を歩まれた主の犠牲的な愛へと私たちを導く。本来自己中心的な存在である私たちが、隣人への愛と思いやりに生きるようにされるのはこの十字架の愛を知ったときである。